

佳作

私のヒーロー

高知県 清和女子高等学校三年 申有美

二〇〇〇年八月一日、真夜中に私の弟が産まれました。二四四〇グラムで、普通は頭から産まれるはずですが、おしりの方から生まれ、さらにへその緒が絡まっていたためか、しわしわの状態で産まれてきました。私と弟はちょうど一つ違いの年子です。そして、弟に障害があるとはわかったのは、その三年後、弟が三歳の時でした。弟は発達障がいのある自閉症を持っています。自分から話すことも感情を口にすることもできません。また、多動症もあり、常に手を動かしているか、いつも歩いています。しかし、障がいをもっているからといって、他の人と顔が違う訳ではありません。弟は真っ白な肌にくりつとした目を持ち、姉の私が嫉妬するくらい可愛らしい顔立ちです。障がいもあり、その可愛らしい顔立ちのせいか、周囲から気にかけてもらいやすく、両親の愛を独占していたのは、いつも弟の方でした。歩くのもしゃべるのもなんでも早く、弟より手の掛からなかった私は、いつも自分に関心を持ってもらいたくて、良い子でいなくて

はいけないという思いが、いつもありました。もちろん両親からしたら、二人に同じくらいの愛情を与えたつもりだったと思います。私もいつも両親からの愛情を感じていたのは確かです。しかし、どこかで弟中心に回る生活を感じ、弟が羨ましかったのも事実です。それでも私は弟がおかしい、みんなと違うと思ったことはありませんでした。すべてが当たり前になっていたからです。

しかし、それが違うと知ったのは、私が小学校二年生の時であり、弟が一年生の時です。弟は入学して間もなく特別支援学級に入りました。そこで、私は初めて弟が障がいを持っていることに気づかされました。いじめられていないかなあと心配していた私は、いつも弟の教室へ遊びに行く振りをして、覗きに行っていました。ところが、いじめられるどころか女の子にモテモテで、小学校二年生の私が呆れるぐらいでした。後に、母から聞いた話では、男の子からかわれたりすることはあったようですが、なんとかそれも解決し、それ以降は幸せなことに目立っていたいじめはなかったようです。それでも、私は弟を守らなければとも思い、責任感を持ち始めました。今思い返せば姉弟なのに、ケンカもしたことはないし、一緒に話したこともないし、おやつをうばいあったりしたことすらありません。むしろ、今でもハグはしますし、いつも私を見て笑ってくれます。また、ご飯を頂戴と言えばあーんして、私に分けてくれます。弟が

障がいを持っていなければと何回も考えたことはありますが、もうそのようなことは全く思っていないません。実は思わなくなった理由があります。

先ほどから、両親も周囲も弟を気にかけて可愛がっていたと述べましたが、歳を重ねる毎に、周囲の反応が変わっていくように思えました。弟に指を差しながら、クスクス笑う人、変な目で見る人が増えました。その時、私は必死に弟を守ろうと、家族で出掛ける時は弟と腕を組んで歩き、誰かが見てくると思えば、素早く弟を見えない位置に移動しました。全て弟のためだと思ってしていました。しかし、その行動は、自分を守りたいだけだったのです。そんな自分が嫌になってきたのが、五年生の時でした。いい子でいなければいけないと思ってきたのに、ただ仮面を被っていただけの自分であったことに腹が立ったのか、今までの弟や両親への悔しさや寂しかった思いなどが爆発して、家族の前で大泣きしてしまいました。それを黙って見ている両親、何もなかったかのようにうろちよろしている弟、すべてがまだ鮮明に記憶に残っています。この時、父が言った言葉で私は心が動かされました。父の言葉は当時の私には難しく、そしてとても温かい言葉でした。

「ノア（弟）が産まれてきたから、他の人にはできない悩みを、こうやって悩めたんだよ。ノアが産まれたのは、すべて神様が私たちに何かを気づかせたくて下さ

ったプレゼントなんだよ。だからノアが産まれたことに感謝しなくちゃね。」

今この言葉と向き合ってみると弟はいつも変わらなくて、堂々としていました。私が思う以上に弟は強く、立派な男の子でした。出掛ける時は、いつも弟から先に腕を組むようになり、逆に私がいつも守られています。そして、何よりも弟のことが大好きなことを改めて感じています。弟は私にたくさんの幸せをくれたヒーローです。弟が、私の弟であり、弟の姉として生まれてくることができて本当に良かったと日々思います。

今、私は親元を離れ、一人暮らしを始めてから六年目になります。しかし、帰省すると弟はハグしてくれて、出掛ける時には腕を組んでくれます。

私の弟は、私の永遠のヒーローです。